



淡路島の海人と 古代史ロマン

『古事記』の冒頭に登場する「国生み神話」で*伊弉諾尊(イザナギノミコト)と
伊弉冉尊(イザナミノミコト)が、最初に生んだ淡路島。

なぜ淡路島が「最初に生まれる島」とされたのか？

それは、瀬戸内海の東端に位置し、畿内への海の玄関口となることから、
古くから交通の要衝となっていたことが関係しているのかもしれませんが。
本特集では、淡路島でかつて活躍していた「海の民」の痕跡を手がかりに、
長年、遺跡発掘に携わってこられた淡路市教育委員会社会教育課の伊藤宏幸さんとともに
「はじまりの島」淡路島の謎に迫ります。



野島の海人が活躍して
いた島最北端の松帆の
浦にて(伊藤さん)

※「古事記」では伊弉那岐命・伊弉那美命と表記されているが、
本文では伊弉諾尊・伊弉冉尊と表記する。

瀬戸内海を行き交う「海の民」

時は弥生時代、わが国に古代国家が成立する前夜、淡路島では北部九州から農耕文化が広がったと同時に、海岸では漁撈(ぎょうろう)文化が広がります。海で獲れた海産物は、漁民が自家消費するだけでなく、内陸部へ運ばれるようになりました。農耕社会が到来したことで、海産物の生産や需要が増えたのです。それにもない、漁撈技術や漁具が改良されたと考えられます。

淡路島は、島であるため、海上交通が盛んでした。そのため、周辺地域や瀬戸内海沿岸など遠隔地との交流も進んだのです。やがてヤマト政権が成立する時代になると、難波・河内との交流も増え、高度な航海技術をもつ「海の民」は「海人(あま)」と呼ばれて活躍し始めます。難所として知られる3つの海峡(明石・鳴門・紀淡)に囲まれている淡路島を拠点に活動する海人は、複雑な潮の流れを読み、その航海技術はトップレベルであったと考えられます。



海人が漁に使っていた蛸壺(たこつぼ)や錘(おもり)

国宝級の大発見となった「松帆銅鐸」

海の民は銅鐸文化にも関わっていたと考えられています。銅鐸とは弥生時代、豊穡の祈りに使われた代表的な祭器です。銅鐸の用途はいまだ謎に包まれており、普段は地中に埋めておき、祀りの際、掘り出して使用したという説もあります。松帆地区で発見された「松帆(まつほ)銅鐸」は、発見された7個のうち1個は、全国でも出土数が少ない菱環鈕式(りょうかんちゅうしき)という古い形の銅鐸で、海の民が早い時期から銅鐸を手にしていたことがわかっています。鐸の内側には、鐸を揺らして音を鳴らす青銅製の棒(舌※ぜつ)が7本も見つかっており、内壁に舌が当たってすり減った痕跡があることから「音を聞く銅鐸」であることが明らかになりました。舌を吊り下げるための植物性の“ひも”が青銅の銅イオンの防腐効果で残っており、放射性炭素年代測定により銅鐸が弥生時代中期の2,100～2,300年前に埋められたことまで特定されています。他地域の銅鐸の多くが内陸や山中から出土するのに対して松帆銅鐸が海辺の砂洲から出土することを考えると、当時、瀬戸内や外洋を縦横無尽に往来した海の民が、航海の無事を銅鐸に祈願したことを想像させます。



「松帆銅鐸」(南あわじ市滝川記念美術館 玉青館)

「五斗長垣内遺跡」と「倭国大乱」

淡路島の北に位置するのが五斗長垣内（ごっさかいと）遺跡で、弥生時代後期に出現した山間地の鉄器生産集落であることがわかっています。この遺跡では、23棟の竪穴建物跡が見つかり、そのうち12棟には建物内の地面に鉄を加工した炉が築かれた鍛冶工房であったことが確認され、多数の鉄片や鉄を加工するための石製工具も出土しています。

弥生時代後期の鉄器には、大陸や朝鮮半島から伝わった技術や素材が使われていたと考えられています。五斗長垣内遺跡が発見されたことで、当時、日本国内ですでに、鉄器生産が行なわれていたことがわかります。それは、海人の交流範囲を裏づけるものでもあります。鉄器はのちの時代に大王が求めた重要な物資でもあり、五斗長垣内遺跡の発見が、同時代に起こった「倭国大乱」のあとに登場する女王・卑弥呼の謎を解くカギとなるかもしれません。

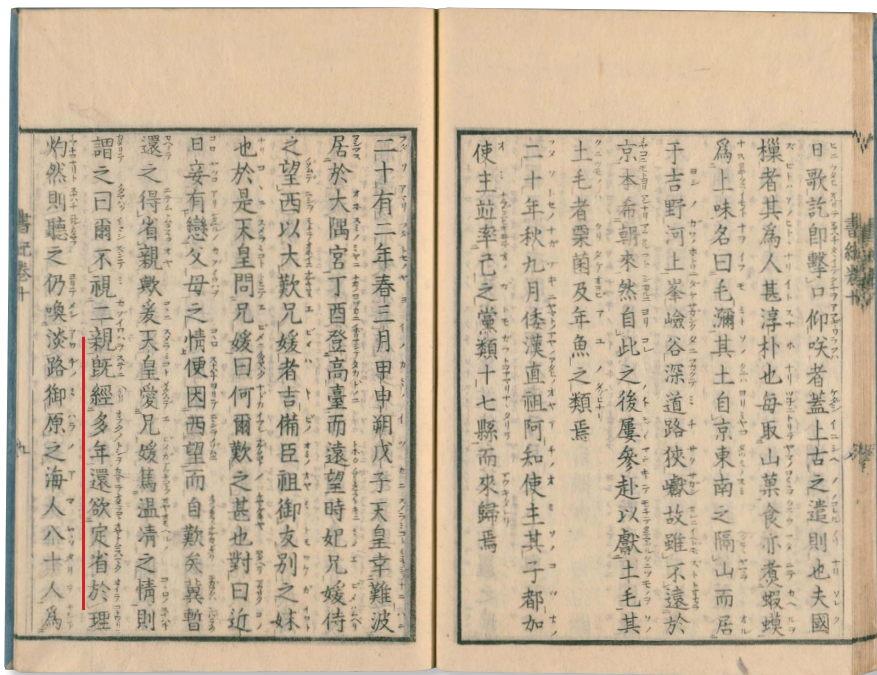


1000℃以上で鉄素材を熱した鍛冶工房（復元）と鉄器（五斗長垣内遺跡）

天皇の「海上交通」を担う航海技術

『古事記』や『日本書紀』に記されている淡路島に関する記述を読み解くと、海人と天皇の関係性を示す内容が多く見られます。当時、海人は卓越した航海技術を買われて、天皇の「水手（かこ）（船の漕ぎ手）」の役割を担っていたとされています。『日本書紀』の「応神紀」では、天皇の妃を吉備に送るため、漕ぎ手として淡路島の御原（みはら）の海人が集められたとの記述があります。また「仁徳紀」によれば、朝鮮半島に派遣していた豪族「吾子籠（あごこ）」を迎えるためにも、淡路島の海人が指名されたといえます。さらに「履中紀」では、安曇連浜子（あず

みのむらじはまこ)に率いられた野嶋(のじま)の海人が皇太子(後の履中天皇)を襲おうとして捕らえられるなど、古墳時代には海人の軍事色が強くなっていきました。



『日本書紀』に「御原の海人」の記述がある(国立公文書館)

古代政権を支えた製塩技術

奈良の平城京から出土した木簡には、淡路島が貴重な塩の供給地として、都に塩を納めていたことが記されています。淡路島では数多くの製塩遺跡が発見されていて、大量生産に向けて技術革新を重ねた海人の苦労を垣間見ることができます。なお、製塩土器は時代とともに、形が変化しました。製塩炉の構造も技術革新が進んでいきます。平安時代に編纂された『延喜式』の記録によれば、朝廷の儀式である「月次祭(つきなみまつり)」の神今食(じんこんじぎ)に用いる塩は「淡路の塩」と定められていました。海人の手によってつくられた淡路の塩が、当時いかに特別なものであったかを物語るエピソードです。



古墳時代初めの製塩土器(北淡歴史民俗資料館)と石敷炉での塩づくりモニュメント(貴船神社遺跡)

古代史ロマンが眠っている淡路島

島内の舟木（ふなぎ）遺跡からも、数多くの土器が発見されています。1966年、地元の小学生が山間の尾根斜面で拾った土器片が弥生式土器であることがわかり、その後、周囲の崖面にもおびただしい数の土器片が折り重なるように見つかったことで、広大な遺跡の存在が明らかになったのです。

舟木遺跡はじつに規模が大きく、現在わかっているだけでも40ha（東京ドーム8個分）。発掘調査を終えた面積はわずか全体の2%にもかかわらず、五斗長垣内遺跡と同じく鉄器工房の跡も見ついているほか、後漢時代の鏡片や青銅器片なども出土しています。あまりにも広大で、すべてを発掘し終えるには、半世紀かかるのではないかととも言われています。



舟木遺跡内にある祠。道端の崖面には土器片が顔をのぞかせている

『古事記』の冒頭に登場し、古くから王権と深く関わり、古代には「御食国（みけつくに）」として豊かな食材を供給し続けている淡路島。島の各地に残る遺跡を訪れば、古代政権を支え、新しい時代の幕開けへと歩み続けた海人たちの情熱や息吹を感じ取れるにちがいません。

淡路島に伝わるオノゴロ島伝説

『古事記』に記述されている「オノゴロ島」は、昔からその場所の特定をめぐるいくつも説がありますが、まだ結論は出ていません。いずれの説も、「オノゴロ島」を決定づける物的証拠はないものの、淡路島では特別な存在の島として語り継がれてきたことは事実です。以下では、現在に伝わる伝説をいくつか紹介しますが、皆さんもご自身の足で島内を巡りながら、自分なりの答えを探してみるのも面白いのではないのでしょうか。

オノゴロ島伝説 ①

「絵島」——自然の造形美と歌い継がれる魅力

絵島（えしま）は、淡路島北端の岩屋港のすぐ側にあります。砂岩が長年の風波によって浸食され、美しい姿が生まれました。絵に描いたような美しい姿をしていることから絵島とよばれるようになったといわれています。江戸時代の国学者、本居宣長（もとおりのりなが）は著書『古事記伝』の中で、この絵島が「国生み神話」に登場する「オノゴロ島」であると唱えています。3,500万年前にできた砂岩の岩肌に見える縞模様は、土中の鉄分が固まったものです。古来、多くの歌人によって詠みつがれた島は、月見の名所として平家物語に登場するほか、西行が歌に詠んだことでも有名です。



奇岩と呼ぶにふさわしい絵島

オノゴロ島伝説 ②

「沼島」——2000年の海人文化を伝える海上の要衝



沼島（ぬしま）は、淡路島の南にある周囲9.5kmの小さな小島です。空からみると勾玉（まがたま）の形をしており、島の大半が山間部でU字の凹んだ部分に漁業中心の集落があります。沼島のオノゴロ島伝説の根拠は「おのころ山」という神体山です。地元では古くから「おのころさん」として親しまれており、オノコロと呼ばれる地名



朝日に神々しく輝く沼島と上立神岩(かみたてがみいわ)

は全国でここにしかなく、おのころ山には「自凝(おのころ)神社」がある(創祀は明治期)。また沼島は奇岩の島でもあり、上立神岩(かみたてがみいわ)と下立神岩(しもたてがみいわ)を伊弉諾尊と伊弉冉尊の「国生み神話」になぞらえる伝説が残っています。

オノゴロ島伝説 ③

「おのころ島神社」——海に浮かぶ小島のような丘に鎮座する

おのころ島神社は、淡路島の内陸部の小高い丘の上にあります。クルマでアクセスすると巨大な鳥居が目飛び込んできます。鳥居の高さ約22m。神社のあるこの地域は、かつては御原(みはら)と呼ばれ、神社は小高い丘にありますが、古代は海の中に浮かぶ小島であったと考えられており、古くから「おのころ島」と親しまれ崇敬されてきました。付近には、伊弉諾尊と伊弉冉尊が天の沼矛をもって海原をかき回したとされる「天の浮橋」や海辺に葦(あし)が生い茂る古代の日本国の別名「葦原国(あしはらく)」の伝承地もあります。



巨大な鳥居が映えるおのころ島神社。塩産地として境内から砂塩がとれた(御砂所)。